

若いお母さんたちへ

小学生の娘たちと共に

はるにれの会
友定 啓子

私の二人の娘は、この春で小五と小三になった。身体

もすんすん伸びて、長女は一四八センチ。おんぶでもし
ようものならヨタヨタ、ズルズルである。そんなに大き
くなっているのに、生活の合間に出現する遊びは、幼児
時代のものが健在で、見ていてとてもおもしろい。そん

な小学生の子ども達との生活のひとコマをご報告する。

○自然の中で

今朝、宏美が「ねえお母さん、つくしのいっぱいある
とこ教えて。」と聞く。一週間程前、通りすがりにたく

さんあるところを見つけた話をしていたからである。教えてやると、とぶように出かけて行き、しばらくして、両手いっぱい草花を抱えて戻ってきた。「お母さん、これよもぎ。よもぎもち作ってね。それとつくし、それから、こっちは、笛を作るぞ、」なずなやれんげは、台所の小さな花びんへさす。「お母さん、よもぎもち作ってね。」と念を押された。内心ギョッ。作ってみるか……。もち米はあるかな。台所であちこちに首をつっこんでみるが、やっぱり切れている。そうだ、上新粉があったはずと思ったが、探しても出てくるのは白玉粉ばかり。ま、いいか、これで代用、代用。何をかくそう、よもぎもちなぞはじめて作るのだ。実は、宏美の摘んできたこの草が、よもぎかどうかもわからない。ふと見れば、よく似た葉が二種類、混っている。「宏美、これほんによもぎ?」「うん。だって教えてもらったもん。」

「どっちが?」「わからん。」自信なさそう。私は、秘かに図鑑を調べたが、あいにくヨモギの花しかのっていない。ま、いいか。こんなにやわらかいし、いつか農

業の先生が言っていた。「新芽というのはほとんど食べられる。」これに頼ろう。小規模にいいよう。

そして約四〇分後、美しい深緑の、妙につやつやしたなんとも不格好なよもぎもちが六個、お皿の上ののっていた。食べてみて「やっぱり、これはよもぎだ。」と納得。午後になって遊びに来た宏美の友だちが、最後の一個を食べて「まだある?」「お母さん、〇〇さん、よもぎもち、おいしいって。また作ってよー。」「エーッ。」

「よもぎとってくるから。」そんな……。たった今、蒸し器も洗って、すり鉢をやっとこさきれいに片付けたところなのに。宏美とその友だちは出かけて行った。一人とり残された姉の麻紀は「そうだ、れんげで遊ぼう。」とこれまた出かけて行った。

私は山口に来て、時々、時代が逆転したような錯覚を起こすことがある。私自身は典型的な町育ちなので、自分の子どもが、つくしだ、れんげだ、ホタルだと遊び歩いているのを見て不思議な気分になってくる。菜の花畑の中を、おばあさんに背負われて散歩している子どもを

見たりすると、わが目を疑ってしまふ。都会人のノスタルジアの中にしか存在し得ないと思つていた光景が、ここでは日常的に見られる。

子ども達が帰ってきた。「きょうのれんげは遊べない。」とのこと。条件があるのだそうだ。考えて見れば、一緒に暮らしておりながら、子どもと私とは、自然との関わりがだいぶ違う。私は、子どものように無邪気に自然の恵みを享受できないところが残っている。子ども達が、毎日のように野の花を摘んでもってくるが、道ばたの小さな花なら抵抗ないのだが、椿や水仙まで持つてくる。思わず、人様の庭のものではないかと構えてしまい、子どもの気持ちを台無しにしそうになる。どちらかと言えば子どもにひきずられるようにして、よもぎもちを作ったり、つくしを摘んで食べたり、私自身が味わつたことのない伝統的な文化を体験している。私が頭で知っていることを、子どもが身体と現物で迫ってくる。結局、今、共通の体験をしている。

○小さな冒険——津和野行き

先日、私は、親としてひとつの冒険をした。子どもだけでの、津和野への日帰り旅行を思いついたのである。

麻紀に「ねえ、きょう麻紀と宏美の二人だけで、津和野へ行つてこないか」「エッ！ きょうか」「うん、岡山（祖父母宅）へ行く練習だと思つて。」「ウーン。宏美が行くつて言うならいいよ」「無理にじゃないよ。」

内心、無謀かなと思つた。津和野まで鈍行で一時間半、二人とも行つたことがない。私自身、十年以上も前に行つたきりだ。見知らぬ町で、知る人もおらず、ちゃんとやつて帰れるだろうかと不安でもある。麻紀はもうすぐ五年生だから、それ位の力はあると思う反面、もし事故が、と思うと心配でもある。今までいろんな新しい体験に挑戦させたように思うが、それらはみんな、親が（あるいは大人が）いざという時は助けに出られるという状況の下である。その意味で、今回は異質である。都会にいれば電車は日常であるが、わが家では車が主で、電車にはめつたに乘らない。

「あのね、津和野まで行ってね、好きなおみやげを買って来るといふことにしないか？」ウーン。麻紀ね、電車で行って来たりするのはね、心配じゃないんよね。心配なのは、宏美といっしょに町を歩くっていうこと。」そうか、私は電車の乗り降りを心配していたが、考えてみれば、町を歩くということは、ほんとに自分でやるしかないし、妹と意見が合わなかったり、とび出したりすると危ないし、やっぱりやめようか。と思いつつ宏美に意見をきくと「エッ！ きょう？ お姉ちゃんも行くなら行ってもいいよ。おみやげ好きなもの買ってもいいの。」「そうだよ。」「やった！ 自分の好きなものだけ買ってもいいの？」「そうだよ。」「行ったら遊ぶよ。」「あんまり遊ぶとこないよ。駅のそばにきつとおみやげ屋さんがあるから、そこでおみやげだけ買っておいでよ。」「エー、つまんない。」「ウーン、あっそうだ、ロープウェイがあるよ。」「エッ、ロープウェイ？ のるの？」（しまった、バカなことを言った。）すっかり、乗り気になってしまった二人。しかし、私は万一のことを考え

て、最後の決断ができない。「ウーン。でも心配だ。それを聞いて、麻紀「上海事故のようなことはないじゃろ。」ウッ、全部見抜かれている。これで決まりだ。

一二時五二分湯田温泉発、一四時二分津和野着。駅から二〇分程のところの登山リフトに乗って城山へ登り、城趾で遊んでリフトでおり、おみやげを買い、十七時七分の電車で、湯田温泉には一八時三〇分にもどる、というコースを決める。麻紀は観光案内書を見て「地図があれば、だいじょうぶ」と言う。二人はリュックを出し、テキパキと出かける仕度を始める。お昼は食べて行けば？ と言うと、電車の中で食べるという。時間がないので、おにぎりや枝豆、つけものだけのお弁当。あまりの貧相さに再び食べて行けば？ と言うと、「なんで？ 電車で食べちゃいけないの？」グツとつまって、「いいよ、持ってる。」

困ったことがあったら電話をする、道に迷ったら駅にもどることを言い聞かせ、救急セットを持たせる。「い

い？ もし大ケガでもしたら、お母さんはお父さんに叱られるんだからね。」と本末転倒の念を押す。「わかったよ。ケガや事故がなくて、無事に帰ればいいんだよ。」もう、言うべきセリフも底を尽き、二人を湯田温泉駅まで送り、三輛編成の赤い電車に乗りこむのを見届け、家にもどる。

さて、ここで落ち着いて、自分に与えられた時間を有意義に過ごすべきなのだが、やったことと言えば、リリヤンをあやとりひもを編みながら、時計と時刻表を見比べること。

二時半をすぎ、一回目の電話が入る。麻紀「お母さん、着いたよ。」「無事着いた？ よかったね。今からが肝心だからね、気を付けて行くんだよ。」「うん」「宏美の声をひとこと聞かせて。宏美「お母さん、電車ね！ すわるところ、おもしろかったよ！」と楽しそうな声。あー、よかった。リフトへ行く道を教えてやりたいところだけど、私も知らないので手も足も出ない。あれこれ思いめぐらしながら待つこと二時間、二度目の電話。麻紀

「予定通り電車に乗りまーす。」「駅に着いたの？」「うん。」「うまく行った？」「うん。宏美の声を聞かせまーす。」宏美「成功、成功、大成功！」「よかったね。電車に乗るの気を付けてね。何行きに乗るか知ってる？」「うん。お姉ちゃんが知ってる」「お姉ちゃんが知ってるじゃダメなの。いい？ お姉ちゃんに言ってるね、小郡行き。」「うん。バイバイ。」もう、この他力本願の気楽な奴め。あー、でも安心した。そして六時半、無事到着。

家に着くと二人は予算六〇〇円で買ったおみやげを並べる。それぞれ小さな包みが三つずつ。麻紀「だいじょうぶ。お母さんのもお父さんのもあるから。」宏美「さて、お母さんのはこの中でどれでしょう？」「ウーン、これかな？」とたんに、ゲタゲタッと笑いころげ「ブルー、それはね、ミニうんこ。」「エー!!」あけて見れば、小さな座ぶとんに鎮座した幸運のミニうんこ様だった。「じゃ、こっち」「あつたりー。」あけて見れば、『愛してる』のメッセージ付きウシのキーホルダー。父親

用は『やればできる』だった。自分用に、小銭入れ、和紙、和紙を使ったミニチュアのゲタ。よく、六〇〇円でこんなに買ったものだと感じた。「このキーホルダーね、二〇〇円だったんだけどねー、お店のおじさんがね、一五〇円にまけてくれたぞ」「エー、どうして?」「全部で六五〇円になったからね、六〇〇円しか買えないって言ったぞ」「へえ、すごいやさしいおじさん、よかったね。」

このあと買って来たものを全部広げ、和紙も並べて「いらっしやい、いらっしやい」とおみやげ屋さんの開店。その満足そうな顔に私はいい一日になってよかったと思う。

○小学生と遊ぶ——ありんこ市

私のころころの子育ての関心は、子どもと遊びをすること。もう小学生なので変な感じもするのだが、学校生活の後押しはつい干渉になりそうなので、最低限におさえて、極力子どもと生活を創るという方に力を入れてい

る。といっても、二人とも水泳に熱を入れているので時間をそちらにずいぶんとられてしまい、親二人が日曜日にとり残されるということもしばしば。そんな中で、みんなの関心は「ありんこ市」。

これは、山口市のおやこ劇場の恒例の行事で、手づくりのおもちゃや食べ物を売り買ひして楽しむ。サークル毎に店を出すのだが、私のサークルは、三年前、麻紀のクラス活動で親しくなったメンバーを中心に、大人七人子ども十四人。二年前、ありんこ市にはじめて参加した時に、ブーメラン、クッキー、ヨーグルトゼリー、赤飯おむすびを出して、飛ぶように売れ、大人達はすっかりこの企画が気に入ってしまった。それで二回目は、はじめからヤル気十分、前年にも増して豊富な品揃え、クッキー、赤飯おむすび、シャーベット、ポップコーン、吹き玉(三種)、ペロペロ人形、お面、牛乳キャップのメニューがならんだ。牛乳キャップに至っては、九州マークが売れるということで、新幹線で九州まで行ったという恐るべき人もおり、そのかいあって大好評。吹き玉は、栄

えある「今年のヒット商品」に入った。この時は、子ども達は売り子として大活躍をした。

今年も、子ども達が作る側にも参加してきた。商品のアイデアをもってくる子もいる。年毎に子ども達の成長がわかる。今年の商品は、カミコプター（紙トンボ）二〇〇個、着地ネコ一〇〇匹、歯みがきポート三〇隻、バックンガエル二〇匹、ケロちゃん人形五〇個、それにリリヤンで編んだあやそりひも、ストローの紙袋で作る花などをもう作り始めた。釣り堀りをやるのか、という話も出ているし、食べ物を用意もある。値段はタダから四〇円位どまり。子ども一人のお小遣いは一五〇円であるから、価格はできるだけおさえる。

ありんこ市になると、母親達は興奮する。その興奮の渦に巻きこまれて、子ども達も動き出す。上は中学生から下は幼児まで、それぞれの条件と関心に合わせて、様々な関わり方をする。ゆくゆくは子ども達に収支決算までまかせ、企画そのものも自力で組めるようになってほしいと願っている。あまり自信はないのだけれども、せ

ひこうした手づくりの子ども文化の担い手になってほしい。商業文化や受験体制にからめとられるだけでなく。この子ども達が中学生や高校生になっても、ありんこ市に参加していたら最高だなあと思っている。

ありんこ市が最大の行事であるが、季節の折々に、食事会や野外炊事、ハイキングなどを計画する。ウォークラリーなどをやると子ども達はすぐ乗ってくる。小学生のふだんの生活は、学校、宿題、クラブ、テレビ、おけいごとでほとんど埋められてしまう。その中で、親子に文化を伝えるということがとても難しい。私は、家事と遊びを、子どもとの生活の中に可能な限りとりこみたいと思っている。家事は、必要上、やってもらうことである。朝の忙しい時に家族で家事をするのは、せわしくもあるが楽しい。

親が準備をする遊びというのも変であるが、親同士のつながりで子どもが集まるので、子どもにとっても必ずしも好きな仲間というわけではない。ふだんは〇〇ちゃん、キラ、とか言っているのだが、一緒に何かをする

ということになると、○○ちゃんは××が得意なんよね
ーと言いながら、お互い認め合っていることがある。き
ようだいのように反発しつつも協力するというシーンが
たくさんある。そして、その中でお互いを知り合ってい
る。先日、この子ども達が劇を上演した。自分達ではと
んど仕上げたが、その配役の妙に大人達はあとで考えて
驚いたものだ。上級生は最も中心的で全体をカバーでき
る役をとり、中堅どころには、それぞれワンポイントず
つ観客にアピールできるシーンを作り、そして低学年や
幼児には、難しくはないが、やりたがりそうな役を配し

ており、しかもそれぞれの性格や雰囲気によく合うもの
をふりあてている。劇が終わってもいつまでも帰ろうと
しない子ども達を見て、そこに成長の一つの姿を認める
ことができ、私達はとてもうれしかった。

子ども達が大きくなってしまつて、特別に世話をしな
くても毎日の生活が流れていく。一方で大人と様々なこ
とを共有できる力がついている。だから今は、親と子が
同じ文化を共有し、創り合える幸福な時期ではないかと
思っている。

